PHOTO／K.KIMURA

書想インタビュー　PART2

農薬、除草剤頼みの米作りに農家からの反撃が始まった！

小さな生物を絶滅の危機に追いやる農業近代化は、大きな誤りを犯している

金丸弘美 KANAMARU Hiromi
『メダカが田んぼに帰った日』著者

「田んぼを機械化しやすいように整備し、農薬や除草剤を多用した。その結果、メダカなどの生物が絶滅寸前となったばかりか、農薬障害や環境破壊の問題等が起きてきたのです」と、『メダカが田んぼに帰った日』の著者で、農業や環境問題のコーディネーターとして活躍する金丸弘美氏。最近、そうした現状への反省から、農家が農地をなんとか再生させようという活動を始めた。おかげで、多くの生物が甦り、稲の株もしっかりするという好結果が生じたという。そんな農民の奮闘を描いたのが本書である。「大都会にクマネズミやカラスが跋扈（ばっこ）しているのも、農地が荒れた事と無関係ではない」と言う、金丸氏を訪ねた。

＊

――ネズミ取材がきっかけとか。

金丸　10年前に、繁華街やデパ地下でネズミ駆除の専門業者の活動を取材して、ネズミが殺鼠剤に抵抗性を持って死ななくなり、知能も発達して、駆除が困難になった。電線やガス管をかじって火災を起こし、サルモネラ菌や家ダニを持ち込んだりする、という事実を知った。それがいつから始まったのかといえば、70年頃、農業の近代化が叫ばれ、ダイオキシンの元凶とされるDDTやパラチオンなど農薬が大量に使われた頃です。また、都市近郊では田畑が宅地化し、山に住んでいたクマネズミが都心のビルに進出したのです。

――70年といえば万博の年。

金丸　まさに高度成長期で、外食が産業と言われ始め、食の欧米化が急激に進んで、食べ物がどんどん工業製品化していく。例えば、ニンジンは、タネを植えると一斉に発芽して同時期に収穫できる。日持ちがよく、真っすぐで効率よく機械にかけられる、という〝農業製品〟になった。また、葉に虫がついていると値段が落ちるからと、必ず出荷前には殺虫剤を撒くように、という指示が農協からくるといった事態さえ生まれるようになった。その頃からアトピーが急増します。またその一方で輸入が増え、食糧自給率40%は先進国で最低です。さらに野菜のタネの9割が外国産だといいます。

――そんな農業に疑問が生じた。

金丸　そうです。95年、初めて不耕起栽培（自然耕栽培）の田んぼを見たのですが、低温で育てた苗を耕さない田に植える。農薬やガソリンを減らしたいと採り入れた農法ですが、機械化された田より、根がしっかりと張りしかも味の良い米が取れる、特に冷害には強かった。また、その田にはドジョウやトンボばかりか、絶滅危惧種としてレッドデータブックにのっているメダカやトウキョウダルマガエルまでが戻ってきた。冬に水を入れた田には、ガンや白鳥まで飛来した例さえあるのです。

――他とのトラブルの心配は？

金丸　ほとんどの田んぼは大型機械を入れるために整備され、パイプが張り巡らされ給水から排水までできるようになっている。稲刈り後は、完全に水が無くなり、田んぼに生き物が住めないのです。それで一部の田に水を入れようとすれば、電気代が何十万円もかかる。農薬の空中散布も村全体の合意がないと止められない。仕方なく水を排水路から取ると、農薬が入ってるかもしれない、それでは有機JASマークは認められないことになる。そこで活性炭を入れ自然の水に戻すという負担が生じます。また、水が漏れては困ると、田も他の人と離れたところにせざるをえないのです。

――農薬論議も巻き起こった。

金丸　実は、中国産を問題にする前に、日常買っている国産野菜にも、ふんだんに農薬が使われているのです。たしかに有機栽培の農産物は、マークを付けるようになった。でも、普通の米は何回農薬かけてます、ということをなぜ言わないのか？　そんな疑問が生じますよね。例えば、お茶には10回近くも農薬がかけられている。それは公表されない。しかし、韓国では、政府が農薬を40%、化学肥料を30%減らす、というような明確な方針を出しているのです。

――農業はやりにくくなった？

金丸　もう都市近郊農業というのは、土地も税金も高くて成り立ちにくくなった。ところがその一方で、都会暮らしの人たちが土に触れたいという願望も強く、練馬区では、カルチャーセンター方式にしたら大人気ですし、農業をやろうという若い人たちがすごく増えている。農業が危ないというのは、方向性が示せない国の農業政策や農協が危ないのであって、〝農業は元気なんだ〟と、僕は思っています。

『メダカが田んぼに帰った日』

数十年前は誰にとっても身近だったメダカが、著しい農法変化により現在はレッドデータブックに掲載。その状況下で注目される「不耕起栽培」とは？　スパルタ式に育てられた苗が無農薬農法の耕さない田んぼでたくましく成長。そこにはメダカをはじめ、様々な小動物や虫たちが自然のままに暮らし、多くの野鳥が飛来する豊かな生物環境が出現した。収穫量は従来の田んぼより多く、さらに冷害にも強いという。すべての常識を打ち破る自然農法に挑戦した人々と豊かな自然の物語。

学習研究社　1260円